2008 年 12 月 24 日放送

領域別入門漢方医学シリーズ

ペインクリニック領域と漢方医学

昭和大学横浜市北部病院　麻酔科　教授　　世良田　和幸

(3)腰痛に対する漢方治療

腰痛の原因には、風、寒、湿などの外的な環境的、気象的変化や、打撲・骨折による外傷、感情の失調などのストレス、老化や長期間の過度の労働、過度の性生活や、慢性消耗性疾患による身体の衰弱、また生来の虚弱などが挙げられます。これらの諸因子による腰痛の病態は、漢方でいう気滞（気うつ)、瘀血、気血両虚、腎虚、裏寒などによることが多いわけです。

腰痛は実証の腰痛と虚証の腰痛に基本的には大きく分けられます。一般に急性の腰痛については実証が多く、慢性の腰痛には虚証が多いといわれています。しかし、腰痛の発症には様々な因子が関わっておりまして、その病態の診断には十分な注意が必要でとなります。初回の漢方薬の処方があまり効果が無くても、さらに良く診察すれば、次の処方が見えてくるわけです。

それでは、腰痛の漢方治療に入りたいと思います。まず最初に、風、寒、湿による腰痛

に対してですが、寒冷や湿度の高いところに長く滞在しますと、漢方でいう風、寒、湿の邪が体や腰部に侵入して、気、血が停滞して腰痛が発症するといわれています。症状としては、静かに仰臥していても痛みが強く、寝返りも困難となる。あるいは天候の変化によって症状は増悪し、腰部を温めることによって症状は一時的に軽快する、というわけであります。

処方につきましては、風湿の腰痛に関しては、症状としては腰痛の部位があちこちと移動し、腰が重だるく痛いと。そういった腰痛に対しては、薏苡仁湯合桂枝茯苓丸などがしばしば用いられます。寒湿の腰痛、これは冷えを伴っており、痛みは寒さで増強し、温めると軽快するというものです。この寒湿の腰痛に対して、頻尿を伴って、腰から下の冷えが強い場合には苓姜朮甘湯を、全身の冷えがある場合は当帰四逆加呉茱萸生姜湯を、上半身がのぼせ、下半身が冷え、胃腸の弱い人に対しては五積散が用いられています。

次に、腎虚の腰痛についてです。

老齢化や長期間の疲労、不節制などにより気血両虚となりまして、腎気を消耗することによって発症する腰痛とともに腰部の疲労感や脱力感を伴うようになります。また、冷えとともに夜間頻尿などを訴えることが多くなります。症状は、横になることによって軽快することが多く、また動きすぎる、また過労によって症状が増悪するのがこの特徴であります。

この腎虚の腰痛は、大きく分けて 2 つありまして、腎陽虚の腰痛がございます。この腎陽虚の腰痛については、四肢に冷えがあり、夜間頻尿を伴う。腹部症状として小腹拘急や臍下不仁などの腹証を伴うことが多く、老人や病後の患者の腰痛に用いられます。冷え症や口渇、夜間頻尿、小腹不仁などの症状を伴うときには八味地黄丸を用います。しかし、八味地黄丸を使ったときには食欲が低下することに注意しなければなりません。八味地黄丸よりも症状が強く、しびれ感なども伴う場合は牛車腎気丸がしばしば用いられます。

腎陰虚の腰痛につきましては、過労や熱性疾患後の口渇、顔面紅潮、不眠、手足のほてりを伴うような腰痛でありますが、腰や下肢の脱力感、疲労感が強く、のぼせ、手足のほてり、寝汗などを伴う場合には六味丸が用いられます。

風寒湿の腰痛、腎虚の腰痛に続いて、3 番目は瘀血の腰痛であります。

捻挫や打撲、重い物を持ち上げた後などに筋肉や経脈が損傷されて気血の運行が阻害され、瘀血状態が治癒しないまま長期化した状態であります。痛みと漢方、この理論にずっと通じているのが「通じざれば、すなわち痛む」という理論でありますが、痛みの概念の特徴的な痛みでありまして、特にこの瘀血の腰痛に対しては、痛む部位は固定性で、日中が軽く、夜間重いのが特徴です。また時間的には、夜半から早朝にかけて強く痛むことが多いのが特徴です。

処方としては、瘀血症状、腹証でいう小腹急結や、舌裏静脈の怒張を伴う場合には桂枝茯苓丸や桃核承気湯が用いられます。また、瘀血以外にも血虚、水毒などの貧血症状とともに浮腫を伴うような場合、夜間痛が強い場合などには疎経活血湯が用いられます。

松田先生の本に『臨床医のための漢方』という本がございますが、ここには、腰痛の急性と慢性の区別を書かれております。急性痛に対しては芍薬甘草湯や芍薬甘草附子湯などの漢方薬が用いられる。また、慢性では当帰芍薬散、八味地黄丸、大防風湯を用いるなどと書かれておりますが、これも腰痛を考えるうえで非常に大切なことであります。

また、今までの 3 つの腰痛に対して、いくつかの薬が加えられることがございます。いわゆる合方というものですが、冷えがより強い場合には、加工ブシ末や修治附子末などの附子剤が用いられます。また痙攣性の疼痛、非常に強い疼痛には芍薬甘草湯を合方することによって症状の緩和を得ることができます。2 剤とも本来は頓服薬であり、両薬ともに長期に漫然として使用しないような注意が必要であります。この 2 つの処方を他の漢方薬とうまく組み合わせることも、腰痛に対する漢方治療のコツの一つといえます。

また、腰の痛みには、反対側の腹証が大変重要になりますが、腰痛があって、腹証で胸脇苦満が著明で、腹直筋の緊張が強い、いわゆる腹皮拘急といわれる場合には、柴胡剤のうち柴胡桂枝湯が処方されます。これは、腹直筋などが人間の本来のコルセットの代わりになっているものが弱くなることによって腰痛が発生するならば、柴胡桂枝湯を飲むことによって、腹部の緊張が強くコルセット状態になっているための筋を弛緩させ、症状の軽減をはかる処方であります。